

幼児の音楽表現を評価するための 保育者の視点に関する一考察

— 感性と表現する力、環境に着目して—

佐藤 厚
今井 香織

1. はじめに

幼稚園教育において評価とはどのようなものであろうか。幼稚園教育要領では、第1章の第4において「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」としてその言葉が記されている。その内容は以下の通りである。

幼児一人一人の発達の理解に基づいた評価の実施に当たっては、次の事項に配慮するものとする。(1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。(2) 評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

また、文部科学省(2019)による『幼児理解に基づく評価』では、評価は次のように定義されている。

保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討して、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求めることが評価なのです。

さらに幼稚園教育要領解説には、「評価は幼児の発達の理解と教師の指導の改善という両面から行うことが大切である」(p.97)との記載もされている。

以上のことから、幼稚園教育における評価とは、小学校以降の教育にみられるような成績に繋がる評価とは異なり、保育者が幼児の発達の理解と自身の指導の改善という両面から保育をより良いものに改善していくための手掛かりを求めることであるといえるだろう。

では幼稚園教育において、音楽表現に関する評価とはどのような観点から行うべきであろうか。幼稚園教育において保育者が幼児の音楽表現に関わる活動を援助する際、その活動をより良くするためにどのような視点から改善の手掛かりを求めていくことが必要なのであろうか。

本稿では、「評価」を「保育者が保育をより良く改善していくための手掛かりを求めること」と定義し、幼稚園教育における幼児の音楽表現を援助する上で保育者に必要な評価の視点について、幼稚園教育の基本とされる「環境」と小島(1998)の「表現の原理」に着目しながら考察する。

2. 保育者が考慮する必要のある環境の分類

幼稚園教育要領において、幼稚園教育は「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであること」が基本とされている。また、文部科学省(2019)は幼稚園教育の充実について、「幼稚園教育においては、教育内容に基づいて計画的に環境をつくり出し、幼児期の教育における見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって幼児が主体性を十分に発揮し展開する生活を通して、望ましい方向に幼児の発達を促すようにすることが重要」(p. 2)であるとしている。すなわち、幼稚園教育において環境を考慮することは重要な要素であるといえる。

さらに、幼児の音楽表現に関わる領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されているように、豊かな「感性」と「表現する力」を養うことが求められている。そして、「感性」に関しては幼稚園教育要領解説で、幼児が「豊かな感性や自己を表現する意欲は、幼児期に自然や人々など身近な環境と関わる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わうことによって育てられる」(p.223)とされ、「何よりも幼児を取り巻く環境を重視し、様々な刺激を与えながら、幼児の興味と関心を引き出すような魅力ある豊かな環境を構成していくことが大切である」(p.225)と記されている。加えて、「教師は、幼児が周囲の環境に対して何かに気付いたり感じたりして、その気持ちを表現しようとする姿を温かく見守り、共感し、心ゆくまで対象と関わる

ことを楽しめるようにすることが、豊かな感性を養う上で重要である」(p.225)とも記されている。これらから、音楽表現において、幼児の「感性」を養う点においても「環境」が重要であることが読み取れる。

では、幼稚園教育において基本とされ、音楽活動に関わる領域「表現」のねらい等でも重要視される「環境」とはどのようなものであろうか。

幼稚園教育の環境構成については幼稚園教育要領解説で、「環境の構成において重要なことは、その環境を具体的なねらいや内容にふさわしいものとなるようにすることである」(p.238)とされ、「環境を構成するということは、物的、人的、自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況をつくり出すことなのである」(p.239)と記されている。環境を構成する際に必要な条件とは具体的にどのようなものが挙げられているのか、幼稚園教育要領解説に実際に記されている「環境」という言葉を抽出し整理すると、以下のように分類することができる。

〈物的環境〉

物的環境に関しては具体的に、「様々な遊具や用具、素材」(p.239)、「教材」(p.40)、「物や場」(p.243)、「園庭の自然環境、テーブルや整理棚など生活に必要なものや遊具」(p.91)等が確認できた。

そしてこれら物的環境に関しては、「教師がモデルとして物的環境への関わりを示すことで、充実した環境との関わりが生まれてくる。」(p.28)とされている。

〈人的環境〉

人的環境については、「人的環境とは担任の教師だけでなく、周りの教師や友達全てを指し、それぞれが重要な環境となる」(p.40)ことが明記され、中でも特に大きな役割を担う教師は、「一人一人の幼児に対する理解に基づき、環境を計画的に構成し、幼児の主体的な活動を直接援助すると同時に、教師自らも幼児にとって重要な環境の一つであることをまず念頭に置く必要がある。」(p.40)とされている。

〈空間的環境〉

空間的環境に関しては、「戸外」、「室内」、「園庭」、「遊びの拠点となるような空間」、「広い空間」、「季節に応じた自然環境がある空間」(p.149)等が確認できる。そして

保育者は、「幼児が実現したいと思っていることを理解し、空間の在り方やそれに応じた遊具の配置を考えなければならない」(p.149)とも記されている。

〈社会的環境〉

社会的環境としては、「地域社会で行われる行事」(p.107)、「地域の自然、高齢者や異年齢の子供などを含む人材、行事や公共施設などの地域の資源」(p.126)等が読み取れ、「地域の行事や様々な文化に触れることを楽しんで興味や関心を深めることは、地域への親しみや地域の中での学びの場を広げていくことにつながっていく」(p.58)とされている。

〈自然環境〉

自然環境については、「風の音や雨、身近にある草や花」(p. 8)「動植物」(p.61)「季節に応じた自然環境」(p.149)、「どのような樹木を植えておくかといった園内の環境から、保育室内でどのような生き物を育てるのかといった環境」(p.199)等が挙げられている。しかし、「園庭の自然環境」は幼稚園全体の物的環境として述べられているように、自然環境が「落ち葉や木の実」(p.101)といった遊ぶための大切な素材となる物的環境になり得ることや、空間的環境についての記述の中で「季節に応じた自然環境」が触れていること、また社会的環境においても「地域の自然」が触れていることから、自然環境は物的環境や空間的環境、社会的環境と密接に関わり合う環境であることが窺える。

〈言語環境〉

言語環境に関しては保育者が、「言語に関する能力の発達に思考力等の発達と相互に関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、遊びや生活の様々な場面で言葉に触れ言葉を獲得していけるような豊かな言語環境」(p.103)を整えたとともに、「獲得した言葉を幼児自らが用いて、友達と一緒に工夫したり意見を出し合ったりして考えを深めていくような言語活動の充実を図る」(p.103)ことが重要であるとされている。

〈時間的環境〉

時間的環境に関しては、「時間の流れとは、幼児一人一人がこれまでの遊びや生活でどのような経験をしているのか、今取り組んでいる活動はどのように展開してきた

のかということである」(p.109)と記されている。時間を環境として構成することは、幼児一人一人の活動を時間の軸から見つめなおし、その上で活動の展開を構成していくことであるといえる。

これらより幼稚園教育における環境構成では、物的環境、人的環境、空間的環境、社会的環境、自然環境、言語環境、時間的環境といった要素を考慮する必要があり、保育者にはこれらの環境を相互に関連させ構成していくことが求められているのである。したがって、環境を具体的に考えその構成を適切に行うことは、豊かな感性を養い、幼稚園教育を充実させるための手がかりとなるだろう。

3. 感性の働きを伴う表現の発生とその展開

保育者は、先に分類した環境を相互に関連させながら幼児の音楽表現に関わる活動を進めていくことが求められる。では、音楽表現に関わる領域「表現」で養う「表現する力」や「感性」は、どのような発生過程や展開により幼児の中に現れるのであろうか。本項では、領域「表現」で養うことが目指される「表現」と「感性」について、それらが幼児の音楽表現の中でどのように生じ展開されていくのかを、小島(1998)の「表現の原理」を基に整理する。

(1) 表現

小島は『音楽による表現の教育』(1998)の中で、「『表現』は、外的なものの働きかけによって生じた自分の『内なるもの』を、素材を通して自分の身体の外に表すこと」(p. 2)と定義している。「内なるもの」とは「経験、観察、記憶、イメージ、思考、情動、感覚、感情などが絡み合っ起こす心の動き」(p. 3)であり、「ひとが感性を基盤に外界と相互作用する過程で、外界とのズレを感じ取ったときに『内なるもの』が生まれる」(p. 6)としている。また、子どもが「外界」との相互作用を通して自分の中に「内なるもの」を形成する場合、「『外界』としては自然や生活環境から化学や芸術や文化までさまざまに考えられる」(p.118)と述べている。また、表現は「内なるもの」と外界との相互作用であり、「内なるもの」を外に出すために、音や色、形や言葉等何らかの媒体が選択され、相互作用する中で曖昧だった「内なるもの」が把握され整理されていくという(p. 6)。

すなわち、幼児の表現が生じる根底には「内なるもの」である心の動きが起こることが

重要であり、表現になり得るには媒体を通し「内なるもの」を外に出す過程が必要であるということである。

また小島は、「内なるもの」を外に出す行為については、「表出」と「表現」があるとも述べている。衝動的に音を出しているようなものは「表出」であり、主体と媒体との相互作用が生じることで「表現」になると述べている。そして、「表出」が「表現」になるためには「内なるもの」について自分自身で認識する必要があるとし、「他者の存在が外界との新たなズレを意識させてくれる」(p. 9)ことで「表現」が発展していくとしている。さらに、他者の音の使い方や組み合わせに存在する新しい視点を自分の創作に取り入れることによって、新たな認識と想像が生まれ「内なるもの」自体が作り替えられ、認識と想像が生まれることによって外界との相互作用の基盤となる感性に質的な変化をもたらし、外界を見る目も変わってくる」(p.11)としているのである。

これらから、幼児の中から表れるものとしては「表出」と「表現」が考えられ、「表出」は「表現」に展開させることが可能であり、「表現」は他者とのかわりによってさらに発展させることが可能であることが窺える。

(2)感性

では、感性についてはどうであろうか。小島(1998)は、「外界に自分とのズレを感じたときに情動が起き、外界の様々な事象から、感性に共鳴するものが選びだされ、人に働きかけてくる」とし、『「内なるもの」を生む基盤には感性が働いている」(p. 5)と述べている。また、表現は「内なるもの」と外界との相互作用であるが、「相互作用をもつには、ひとが外界と、まずつながらなければならない。それをつなぐのが『興味』」(p.13)であり、『「外界」の動きを感性によって感じ取り興味によって働きかけるという、表現のための相互作用の基本型を獲得させることは重要なことである」(p.133)と述べている。そして、自分のイメージする音に近づけるために表現を工夫していく過程で「問題の解決のためにイメージの動きを基盤にして、過去の経験を結合したり変化させたり分離したりして新しい情報を生み出すという『想像的思考』」(p.17)が働き、『「内なるもの」と「外なるもの」に対して新しい見方や感じ方ができるようになる」(p.15)ことが感性の発達につながるとしている。

感性は「内なるもの」の発生時に働くことから、幼児の表現を引き出すためには幼児の感性にまず働きかける環境が必要であると言える。そして、幼児の感性をさらに発達させるためには、想像的思考の働きを促すような保育者の援助や他者との

関わりが必要であると考えられる。

以上のように、領域「表現」において養うことが求められる「表現」と「感性」について、小島(1998)の「表現の原理」を基に整理すると、①「内なるもの」の発生、②表出や表現の発生、③表出から表現への展開、④表現の発展、⑤「内なるもの」の発生時に共鳴する感性の働き、⑥想像的思考による感性の発達という、発生過程と展開の観点にまとめられる。そしてこれらは、幼児の音楽表現に関わる評価において欠かせない観点であると考えられる。

4. 幼児の音楽表現を評価するための保育者の視点

では、幼稚園教育における音楽表現と先に分類した環境とはどのように関連しているだろうか。本項では、前項でまとめた感性の働きを伴う幼児の音楽表現の発生やその展開について、どのような環境構成と関わりがあるのかを整理しながら、幼児の音楽表現を評価するための保育者の視点について考察する。

(1) 感性の働きを伴う「内なるもの」の発生と評価の視点

表現が発生するための一番根底にあるものは、経験、観察、記憶、イメージ、思考、情動、感覚、感情などが絡み合って起こす心の動きであった。そしてそれらは、外界である様々な環境により生じる可能性があった。つまり、保育者には、幼児が外界のどの環境要因によって心が動かされているのかを見極めることが求められるのである。そしてそれらを見極めるためには、幼児がその時何に興味を持ち、何を感じ取っているのかに着目したり、そこに至るまでの時間的環境すなわち活動の展開について配慮したりすることが求められるのである。

例えば皆で『北風小僧の寒太郎』の歌を歌っているとき、一人の幼児が歌わずに窓の外を見ているとする。その幼児は、園庭の木々が風で揺れる様子を見てその動きや音に心が動いているのかもしれない。もしくは、朝保育者が「葉っぱが風で揺れているね」と話したことを思い起こしているのかもしれない。この時保育者は、歌を歌わずにいる幼児の姿から、歌に関連して幼児の心が動いているのかもしれないという可能性を感じ取る必要がある。

したがって、感性の働きを伴う「内なるもの」の発生に関して保育者には、幼児の

心の動きとその環境要因を捉えることができているか、という評価の視点が求められると考える。

(2) 表出や表現の発生と評価の視点

音楽表現に関わる活動を援助するためには、保育者は幼児の「表現」はもちろん、表現へ発展する可能性のある「表出」の発生を捉えようとする視点も求められる。

先に例として挙げた、『北風小僧の寒太郎』を歌う際窓の外の風に心を動かされていた幼児が、風に揺れる葉っぱを見ながら自分の手に持っているハンカチを何気なく揺らしていたとしたら、それは「表出」である。もしくは、しばらくしてその幼児が園庭で風に揺れる葉っぱを思い出し、「葉っぱがゆらゆら～」と紙をヒラヒラさせるようなことがあるとすれば、それは紙を媒体とした「表現」であるといえる。

幼児の「表出」を「表現」に展開させ、「表現」を更に発展させるためには、表出や表現が発生した時点で保育者の気づきが重要である。保育者には、表出や表現の発生を見逃さずに捉えることができているか、という評価の視点が求められるのである。

(3) 表出や表現の展開と評価の視点

先に例を挙げた、何気なく持っていたハンカチを揺らすことで現れた「表出」を「表現」に展開していくためには、幼児の表現を引き出すための環境構成が重要となる。既に述べたように、「表出」から「表現」への展開と「表現」の発展には保育者の人的環境としての役割が大きく関与しており、保育者には、物的環境の提示や人的環境として表現を展開していくための働きかけや言葉かけが求められる。

一例として、幼児が風の音を表現するために保育者が「音」を媒体として提示すれば、子どもたちは強い風や弱い風、台風に打ち付けられガタガタする窓の音等を、保育者が用意した物的環境である新聞紙やティッシュ、段ボール、はたまた自分で見つけ出した様々な素材を選択しながら表現していこう。また、保育者自身が人的環境として幼児に働きかけたり、他の幼児の表現を拾い上げたりしながら新たな視点をもたせることは、幼児の想像的思考を働かせ「表現」の発展や感性の発達を促すことにもつながり得るのである。

したがって保育者には、幼児の表出や表現を展開させ、新たな視点を持たせながら感性の発達を促す環境を構成することができているか、という評価の視点が求められるのである。

5. おわりに

本稿では、「評価」を「保育者が保育をより良く改善していくための手掛かりを求めること」と定義し、幼稚園教育における幼児の音楽表現を援助する上で保育者に必要な評価の視点について考察してきた。その結果、幼児の音楽表現を援助するために必要な評価の視点は、①表現の根源である幼児の心の動きとその環境要因を捉えることができたか、②音楽表現に繋がり得る表出や表現の発生を見逃さずに捉えることができたか、③表出や表現を展開させ感性の発達を促す環境を構成することができたかの3点であると考えた。これらの視点から保育者が幼児の音楽表現に関する自身の援助を振り返ることは、幼児一人ひとりの音楽表現をより深く理解し、その援助を再考し、保育をより良く改善するための一助となると考える。

【参考文献】

- 小島律子(1998)「表現の原理と教育的意義」, 小島律子・澤田篤子編『音楽による表現の教育 - 継承から創造へ-』晃洋書房, pp1-17.
- 文部科学省(2017)「幼稚園教育要領」
- 文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」
- 文部科学省(2019)「幼児理解に基づく評価」